

『ジーニアス英和辞典 第3版』の 発音表記の特色

南條健助



■「発音のジーニアス」

読者の皆さんは、これまでに次のような発音を耳にされたことはないでしょうか。

Internet[イナネツ], twenty[トゥワニー], hundred[ハナード], introduce[イナドゥース], picture[ピクシャー], asked[アースト], also[オーソウ], gifts[ギフス], cool[クーウォ], feel[フィーヨ], girl[グーロ], arrow[エロウ], carry[ケリー], caught[カーツ], law[ラー], accepts[エクセプス], candidate[キャネディッ], children[チュウドウン], grocery[グロウシュリー], poem[ポウム], quarter[コーラー]

実は、いずれも今日のアメリカ英語では非常に一般的な発音であり、私の日々の観察では、アメリカ人の2人に1人以上が、このような発音を日常的に用いているようです。実際、twentyやhundredが、くだけた文章では、それぞれtwunny, hunnerdなどと綴られたり、feelが誤ってfeeyalと綴られたりすることからも、その一般性がうかがわれます。ところが、従来、わが国の英和辞典は、大型のものも含めて、このような発音をほとんど載せてきませんでした。そのため、例えば教室において、テープやCDをお手本にしながら、「聞こえた通りに真似をして、発音してみなさい」と指導してみても、実際に聞こえる発音と辞書の発音表記との間にギャップがあり、「そう聞こえるのは、自分の耳のせいではないか」などと、生徒も教師も、内心、ずいぶん戸惑って

きたものです。

そこで、私は、最初に『ジーニアス英和辞典』改訂版(1994)の発音校閲をお引き受けした時、「くだけた発音や非標準的な発音も含め、実際に用いられている発音をできるだけ詳しく表記する」という新しい方針を提案しました。くだけた発音と非標準的な発音に、それぞれ(略式)、(非標準)というスピーチレベルを示したのも、わが国の英和辞典では、初めての試みでした。そして、2001年に出版された第3版(以下、G3)では、英語音声学や社会言語学の最新の研究成果に基づき、使用頻度の高いAランク・Bランクの重要語を中心に、特にアメリカ英語の発音表記を、さらに充実させました。その結果、G3には、今日、英米で実際に用いられている発音が豊富に盛り込まれ、重要語の中には大型の英和辞典より発音が詳しい語も多数あります。また、個人的に付き合いのある英米の音声学・言語学者の協力を得ることができ、実際には非常によく用いられている発音であるにもかかわらず、英米の英語発音辞典にも載っていない発音が、G3には載っていたりします。今回の改訂によって、従来からの「語法のジーニアス」という定評に加えて、「発音のジーニアス」と呼ばれるにふさわしいものになったと自負しています。

上に挙げた例は、G3では、それぞれ次のように表記されています。

Internet / ɪntərnət, (米略式) ɪnər- /, twenty / twén-
ti, (米+) twánti, (米略式) twéni, twáni /, hundred

/ hándrəd, (米略式) hándərd /, **introduce** / intrəd-
d(j)ú:s, (米略式) ðntər- /, **picture** / píktʃər /, **asked**
/ æskt | á:skt /, **also** / ɔ:lsoʊ, (米+) á:l- /, **gifts**
/ gɪfts /, **cool** / kú:l, (米+) kú:wəl /, **feel** / fí:l,
(米+) fí:jəl /, **girl** / gó:rl, (米+) gó:rəl /, **arrow**
/ érou, (米+) érou /, **carry** / kæri, (米+) kéri /,
caught / kɔ:t, (米+) ká:t /, **law** / lɔ:, (米+) lá:/,
accept / əksépt, æk-, ik-, (米+) ek- / (～s / -sépts /),
candidate / kændədèit-, dət, (米+) kænə- /, **children**
/ tʃíldrən, tʃúl-, (米+) -dərn /, **grocery** / gróusəri,
(米+) gróufri /, **poem** / póuəm-, em-, (米+) póum /,
quarter / kwɔ:rtər, kɔ:r-, (米+) kwɔ:tər, kɔ:tər /

なお、最近は、/l, u, ə/などの発音記号を新たに導入し、精密表記(narrow transcription)を試みた英和辞典も増えてきましたが(『ジーニアス英和大辞典』(2001)もその1つです)、G3では、引き続き、従来からの簡略表記(broad transcription)を採用しています。高校生から大学生・社会人までの幅広い利用者の方々に、もっとも馴染みのある分かりやすい発音記号を使用したからです。上に挙げた例でお分かりのように、「どう表記するか」よりも「何を表記するか」を大切にしました。

■「音声の語法」に関する注記

G3の発音に関するもう1つの特色は、実際に発音がどのように用いられているかという「音声の語法」とも呼ぶべき注記が豊富に盛り込まれていることです。必要に応じて、用例にイントネーションや強勢など文中での発音を示したのは、英米の辞書を含め、『ジーニアス英和』の初版(1988年)が世界で初めてだと言われていますが、わが国の英和辞典で、「音声の語法」に関する注記をこれほど大量に載せたのも、1994年の改訂版が初めてでした。最近でこそ、そのような辞書がほかにも出版され始めましたが、G3では、発音に関する注記をいっそう充実したものにするため、信頼のおける最新の資料を参考にし、時には

電子メールを通じて英米の音声学・言語学者にも意見を求めて、改訂版の注記に加筆修正を施しました。その結果、今日の英米における発音の実態が正確に反映され、発音の実際の使われ方に関して、今までにない詳しい注記を実現することができたと思います。以下に、いくつか例を挙げておきます。

February ◆ / fébju- / を《非標準》とする人もいるが、特に《米》では一般的な発音》

greasy / grí:si, grí:zi / ◆後者は特に米国南部の発音》

often ◆《米》《英》ともに /t/ を入れない発音の方が多く用いられているが、/t/ を入れて発音する人も増えており、教養のある人々の間でもすでに一般的になっている。ただし《米》では今でも /t/ を入れる発音を《非標準》とする人々がいる》

particularly ◆《略式》では /-tíkəli, -tíkəli / と発音されることもある》

president ◆早い発話では /préznt / とする》

something ◆早い発話では /sámptm / と発音される》

ちなみに、アメリカのブッシュ大統領が、nuclear を「ヌーキュラー」と発音するという話は、日米のメディアで取り上げられ、すっかり有名になりましたが(『朝日新聞』2002年11月14日付け朝刊を参照)、G3にはこの発音も/《非標準》n(j)ú:kjələr / として載っています。最新の *Merriam-Webster's Collegiate Dictionary*. 11th ed. (2003) によれば、この発音は、非標準的とされているものの、大統領に限らず、科学者・弁護士・大学教授・政治家など、なぜか教養のある人々の間で広く用いられているそうです。しかし、私たちは真似をしない方が無難でしょう。

(なんじょう けんすけ・桃山学院大学専任講師)